明石の史跡（７９）愛国婦人会への期待

関東大震災（大正１２年９月１日）の発生から５日後、愛国婦人会魚住村委員部は、中尾区長（山崎政助）に、慰問袋の提供を要請したことについては、前述「明石の史跡（６８）」のとおりである。

罹災者にたいする物品の配給が、なかなかスムースに進捗しなかったのか、９月３０日には、女子青年会・婦人矯風会、婦人協会、桜楓会、桜蔭会、新真婦人会、東京女子大学、日本女子大学、実践女学校、自由学園、有隣園等の都下４０あまりの婦人団体が、東京連合婦人会なるものを結成。毎日、１２０～３０人の婦人方が、午前１０時に市役所に集合。７０余ヶ所のバラックに、煉乳を配布するという活動を開始（大正ニュース事典６．５９２頁）。

一方、愛国婦人会兵庫支部（神戸諏訪山武徳殿構内）は、１２月２０日、魚住村役場経由で中尾区長に、「愛国婦人会の必要」と題するパンフレットが配布されてきた（「山崎家文書２」『論叢ゆほびか』４．９６－７頁）。その見出しには、「応急対策は資金の充実にあり」とあって、大震災への救援活動には、資金の裏づけが優先課題となり、それが対策として、会員の拡大に取り組み。下記の提案をする。

通常会員は（「毎年壱円づゝ十ケ年間」または「一時出金なれば金七円」）。

特別会員は（「毎年弐円づゝ十ケ年間」または「一時出金なれば金拾五円」）。

特別維持会員は（「毎年金四円づゝ」「百円に満つるまで金出」）。

魚住村中尾における入会の関連史料は、現時点では未詳とはいえ、相応の貢献がなされたものと考えられる。

明治３４年（１９０１）２月１４日、奥村五百子の提唱をうけて、公爵近衛篤麿・大山捨松（大山巌元帥夫人）らを中心とする発起人会が開かれ、創立された愛国婦人会（国史大辞典１．７頁）。この大震災を契機に、一段の飛躍が期待されるのである。

日本歴史学会会員　　茨木　一成